

琉球の視点

伊豆山敦子

A 解説

1. 伝統的琉球諸方言

奄美諸島から沖縄本島を経て先島諸島にいたる、南西諸島と呼ばれる地域の伝統的諸方言は、今日では消滅の危機に瀕している。

1940年の統計類によると、その人口は以下のものであった¹。

奄美大島 11万、喜界島 2万、徳之島 4万6千、沖永良部 2万5千、与論 8600、
沖縄本島と離島 50万、宮古 6万5千、八重山 3万5千

沖縄本島の詳細：国頭郡 10万6千、中頭郡 14万6千、島尻郡 15万4千、那覇市 6万5千、
首里市 1万9千

1950年の各地区の人口は次のようであった²。

沖縄 58万2611人、宮古 7万4,612人、八重山 4万3973人、大島 21万9,024人、計 92万余

この当時の成人人口は大体方言話者を意味していたと考えてよい。中高年の婦人達は殆ど方言で生活するのが普通であった。

2000年度の沖縄県統計年鑑によると、平成12年の県総人口は、132万1,024人。1950年から増加し続けている³。

しかし、現在では、人口は方言の話し手を意味してはいない。1950年の10才以上の人口は、1995年の55才以上にあたる。上述の統計年鑑によると、1995年、沖縄県の総人口127万3,440人中、55才以上の人口は、27万9,394人である。転出入を考え合わせると、方言話者は、この数より相当少ないと考えられる。仮に25万としよう。

この統計の市町村別は、10の市、本島の2郡37村、宮古郡5村、八重山郡2町、計54市町村に分かれているから、単純に25万人を54で割っても1町村あたり、4千600人程度である。

しかも、現在の行政区画と方言の違いとは一致しない。例えば石垣市の中には、市街地の方言の他に、川平、宮良、白保、その他異なる方言があり、竹富町という一つの中に、

¹ 世界言語概説，p. 317

² 注1と同じ。

³ これは、沖縄県の統計だから、奄美諸島の人口は含まれていない。

黒島、竹富、小浜、波照間、鳩間、新城、古見、祖納、等々異なる方言がある。

同様に平良市の中には、狩俣のように異なる方言があり、下地町といっても、来間島のように異なる方言もある。

本島でも、今帰仁村のように大きな村は、与那嶺と天底で異なる。国頭村の中には、阿波、奥、辺土名、安田など各々異なる方言が多い。本島中部・南部の詳しい方言事情も、ほとんど報告されていない。こう考えると方言的には 54 行政区で割るわけにはいかない。

更にまた、方言の使用度は、その人の生活環境(その 1 世代前の両親との同居期間の有無、共通語地域での生活の長さなど)によって、異なっている。1 世代前と違って、現在、共通語を用いないで公共生活をおくるわけにはいかないのである。無意識のうちに共通語に影響されるから、その選り分けが難しくなる。

このように考えれば、ある 1 方言の文法を調査するために、話者を探すのも難しくなってきた事情がわかるであろう。大都市の人口と小さな島の 1 集落の人口との差を思えば、話者の数が数人ということも珍しくないことが理解されるだろう。それ程、急速に話されなくなってきたのである。

このような理由で、今、琉球諸方言のどの方言にせよ、どの面にせよ、共時的研究は重要なのである。書かれることはなかったが、毅然とした 1 言語体系を持っている方言の研究は、日本語の研究にとっても、一般的な言語研究にとっても実り多いものにちがいない。そして、どこの方言も調査者としての「あなた」を待っているのである。

2. 琉球方言の文法

琉球方言の共時的文法研究は、残念ながら無いに等しい。教育のための研究書も作られたが、それらは方言話者が共通語を学ぶためのものであり、琉球諸方言を学ぶ為のものではなかった。つまり共通語の方からのみ、眺められていたのである。実用的な目的の為なのであるから、しかたがないことであった。

更に、方言研究は歴史的関心が先行して、限られた形だけが採り上げられ、論じられていた。特に音韻・語彙的な関心は強く、そのお陰で辞書は刊行されたが、文法を 1 言語システムとして研究されることは無いに等しかった。共通語(ないし上代語)に翻訳されることが主要であった。

動詞・形容詞など、活用する語に関する研究は本土の枠組みでのみ記述され、それ以外は殆ど顧慮されず、テンス・アスペクト・ムードなどは、本土方言と異なるにも関わらず殆ど研究されていない。

更に、琉球諸方言は変化に富んでいた。島嶼に広がっていたせいもあり、同じ琉球方言の中でも互いに解らないといわれるほどの違いさえある⁴。それらが、どのように異なり、どのように似ているか、文法的な枠組みで明示されたこともなかった。

近年まで、島々への交通に時間がかかり、十分な調査ができなかったのだから、これもしかたがないことかもしれないが、そのため、本土の国語・日本語研究者に十分な情報がな

⁴ 同じ八重山でも、宮良の話者は、与那国方言はわからないし宮古方言も解らないと言う。

く、「日本語」の中で、琉球の諸方言がどのような位置をしめるのか、常に曖昧であった。

主要方言でさえ、文法書といえるものはないのである。つまりその方言を話したいと思っても、参考になるような研究書が殆ど無い(または、手に入らない)のが実情である。従って、方言自体に焦点を当てた共時的調査が緊急に期待されている。

3. 調査の着眼点

方言は話し言葉である。その方言を「話せるように」と思えば多くのことを調べたくなる。「話せる」ということには、音韻・語彙・文法以外の社会的心理的文化的要素等も含まれるが、その中から、文法的要素を抽出するという試みも、楽しい良い訓練である。

4. 研究の現状を示す基本的文献(刊行順)

- Chamberlain, Basil Hall (1895) “Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language”. Tokyo, Z. P. Maruya & Co., Ltd
- 宮良当荘(1930)『八重山語彙 附八重山語総説』東洋文庫
- 岩倉市郎(1941)『喜界島方言集』中央公論
- 金城朝永(1944)『那覇方言概説』三省堂
- 服部四郎・金城朝永(1955)「琉球語」『世界言語概説 下巻』pp. 318-353 研究社
- 服部四郎(1959)『日本語の系統』岩波書店
- 服部四郎(1960)「奄美大島諸鈍方言の動詞・形容詞終止形の意義素」『言語学の方法』所収 pp. 401-412 岩波書店
- 鈴木重幸(1960)「首里方言の動詞のいいきりの形」『国語学』41
- 国立国語研究所(1963)『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- 平山輝男・中本正智(1964)『琉球与那国方言の研究』東京堂
- 平山輝男・大島一郎・中本正智(1967)『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
- 柴田武(1972)『全国方言資料第10巻琉球編Ⅰ』pp. 17-55・『第11巻琉球編Ⅱ』pp. 24-60 日本放送協会
- 法政大学沖縄文化研究所(1975年～現在)『琉球の方言』(1～25号)
- 長田須磨・須山名保子(1977)『奄美方言分類辞典上巻・下巻』笠間書院
- 仲宗根政善(1983)『今帰仁方言辞典』角川書店
- 中松竹雄(1987)『琉球方言辞典』那覇出版社
- 亀井孝 et al. (1992)『言語学大事典』4巻『琉球列島の言語』pp. 771-814 三省堂
- 池間苗(1998)『与那国言葉辞典』私家版
- 生塩睦子(1999)『伊江島方言辞典』伊江村教育委員会

以上の文献でも解るように語彙集・辞書が多く、文法は、あっても形の記述が主体で、解説は極めて少ない。

5. 調査を始める前に

- (1) その方言関連の事を、何でもいいから好きになろう。例えば、そこの景色、海や空の色、食べ物、芸能、話者の方等々何でもいいから何か一つ。(たくさんならもっといい。)
- (2) 話者に出会う方法もいくつかある。一般的には教育委員会に頼むことが多いが、筆者にはその経験がない。もし、筆者同様の普通の人なら、いろいろな方法がある。
 - ① 土地出身者でなければ、必ず宿を取らなければならないから、土地の人が経営する宿を選び、そこで紹介してもらおう。
 - ② 小さな「しま(村)」なら、しまなかのお店(新しいスーパーではない)、郵便局、JA、等の方々、老人会の世話役の方、土地のタクシーやバスの運転手さん、島通いの船主さん等、その土地を知っている方との出会いから、協力して下さる話者が現れるだろう。
 - ③ インターネットにも土地の情報がある。要するに、どこに行っても「方言方言」と喚けばいい。「案ずるより産むが易し」だから、ご縁のあった話者との出会いを大切にしよう。
- (3) 「調査させて下さい」より「教えて下さい」にしよう。理由はあるが、単純に、もし自分が誰かに「あなたの言葉を調査させて下さい」と言われるのと「教えて下さい」と言われるのと、どちらが好ましいか考えてみよう。

後の資料の取り扱いや発表に関しても、話者は「先生」なのだ。全て許可をお願いしよう。
- (4) 少なくとも話者の名前・年齢・男女別は記そう。それを発表するかどうかは別問題。前述のように許可を得よう。消滅の危機に瀕した言語の場合年齢は大切だから、発表できるように理解を得よう。男女別もできれば発表させて貰おう。
- (5) 方言調査以外の雑談も、調査に関係ないと思わないで楽しく聞こう。すぐ、例文作りなどに役立つし、話者の背景を知ること大切。また、親しみも増える。
- (6) 「あなたの話者を信じなさい。」基本的に、話者が間違えることはない。間違えるのは調査者の方だ。質問の仕方が悪かったり、解釈が悪かったり、話者の状態を観察せず無理したり、それから人間だから一寸したミスがあるのは当然だと思わなかったり等々。
- (7) 必ず録音をしよう。できれば、初めから終わりまで全部(勿論許可が必要)。
- (8) 解ったことがあった時は、話者の方にも伝わるように喜びを表そう。何を喜んでいるのか良く解らなくても、相手も同様に嬉しくなるものだし、感謝も伝わる。
- (9) 調査時は、気楽になるような雰囲気になよう。方言は普段着なのだから、調査者も普段着でやろう。話者が思わず同輩知人に話す積りになれるように。
- (10) 言葉だけではなく、話者の表情その他も大切である。自信ありげか、興味なさそうか、昔懐かしそうか等々。解釈や、今後の調査の参考になる。
- (11) 調査が、思うほどは、うまくいかななくても、こう思うことにしよう。「何かが好きになり、誰かと交流できたのは得がたい事だった。自分で方言に接することができただけでも収穫だった。この次は、この土台の上で、何かが得られるに違いない」と。そして例外なくその通りになる。

6. 調査を始める時

- (1) 具体的な人と場を設定する。「書く」「書かない」・・・というのは、既に抽象化である。抽象化は話者の仕事ではない。それは、調査者の仕事なのだ。(話者の内省を大切にすることとは違う。話者の内省は勿論尊重する。)
- (2) 会話する人物を少なくとも **3人**設定しよう。話し手、聞き手、それ以外。
- (3) 話し言葉では、ただ「書く」ということはない。何か書きたいものを見て「書く。」と言ったのか、「書く？」と尋ねたのか、誰が誰に、どんな時、言ったのか明瞭にする。
- (4) 肯定・否定・質問などは、本土共通語と同じだと思わず、丁寧に調べる。
- (5) 無い形、無い表現などは、「無い」ということを確かめておく。これこそ文献資料と異なる、フィールドワークの有利な点なのだ。
- (6) 敬語を調べたいのであれば、基礎的なものから調べた方がいい。現在では、既に、日常あまり方言を使わない場合が多いので、子供の時を思い出すように設定した方が好都合だろう。親兄弟姉妹・親しい親戚とその子供達の中から選ぶのが無難。夫婦間は敬語を使うことがあるから、注意。(親から子へ、夫から妻へ、が無難)

B 項目

調査項目

注記のない実例は、八重山(石垣宮良)方言である。それ以外からも適宜異なる方言を採用し、未発表の事実も採用した。諸方言の共時的研究は未だ不十分だから、これらの項目以外も必要になるだろう。調査者に期待するところは大きい。

1. 表記

琉球方言は変化に富んでいる上、調査もまだ不十分だから、音韻が決定されていない方言もある。先行研究の記述が納得いかない時もある。その時は、音韻の決定が先決だと拘ることはない。それは疑問のままにして、先へ進もう。文法的な事実から観察が精密になったり、解釈ができたりすることもある。とにかく一応の簡略音声表記を心がけよう。

ここでは印刷の都合で次のように書き換える。

Φ→hw/hu, f→sj, dz/z→z, ʒ/ɟ→zj, ʃ→c, g→g, ŋ→G, 成節鼻音→N, 成節無声子音→Q, 無気喉頭化音→大文字, その他変種には大文字を随時使う。

全く知識のない方言を調査する際の注意事項

- (1) 各方言間で音声面も異なりはするが、先行研究で大まかな見当をつけておく。但しそれにとらわれると、かえって難しくなることがある。自分の耳を信頼しよう。
- (2) 基礎語彙(名詞)を集め、音韻的な問題点がどこにあるか大体的見当をつける。
- (3) 本土方言の形の上での対応語を常に意識しておく。
- (4) 話者の内省(音の異同)を尊重する。調査者は意識的に発音して、話者が「いい」と言ってくれるまで、練習する。すぐ出来なくても努力だけはする。
- (5) その音(韻)の見本となる単語を見つけておき、疑問の時には、それを照合する。
- (6) 音韻論的解釈が十分出来なくても先に進もう。常に完璧は目指すけれど、到達できるかどうかは神仏の分野だと……。進むうちに解ることもある。言語は体系なのだから。

2. 代名詞

通常のとおり、1人称、2人称それぞれの単数・複数形を採取する。

- (1) 代名詞の形は語形変化する。私、私は、私の、私が、私を、私も等々の各変化形を取る。無助詞独立形は、「もしもし」と呼ばれ「私？」という場合。戸の外で(最近は電話で)、声で自分だと知らせる「誰？」への答えなど。2人称も同様にする(多くの場合平行的な形ではない)。

宮良の例を図示する。助詞つきは与那国からの例示である。

宮良	1人称	2人称	自己称	3人称	再帰
単数	ba:~banu	wa:~wanu	×	uri	na:ra
複数	banda:	wada:	baga:	uQta:	naQta:
うち	baNca	waQca	baga:	×	naQca

(与那国) uja Nda iri kuja aGa iruN. Nda munu, aGa munu
 それはあんたがして これは 私がする あなたの物 私の物
ano: aTa ja buranuN. Nda aTa ja bu: na: ?
 私は 明日は 居ない お前は 明日は いるか
anu ja numanuN. ×aGa ja (普通に勧められた時)
 私 は 飲まない
Nda Ga buru na ? aGa ja buranuN. u Ga buruN do.
 あんた が 折るの か 私 は 折らない 彼 が 折る よ
 kari Ga ja buttaNtiN aGa ja buranuN.
 彼 が は 折っても 私 は 折らない

- (2) 3人称は一寸難しい。指示代名詞との兼ね合いがある。3系列(コソア)のうちの一つが人称代名詞である可能性もある。単数複数が形態的に区別されることも頭に入れておく。現場指示と文脈指示。物も人も共通に指せるかどうか。文脈指示に多出するものに注意する。3系列のうち1系列は、人を指し難いということもよくある。
- (3) 1人称単数形「私」に当たる語が2個(以上)ある方言もある。それも文体的に異なるのではない。その場合は、複数形も各々単数形に対応して2形ある。歴史的に重要だから形だけでも採集する。また、「私はしない」と「私がする」の「私」が異なる方言もある。

(来間) aga kakadi ⇐ baga kakadi
 私が 書く 私が 書く
baga kakadi / aga kakadi aba kakadjan (×baga kakadjan)
私が 書く 私が 書く 私は 書かない

- (4) 1人称複数形は特に注意する。あなた(達)に対する「私達」(baNda:)と、彼(等)に対する「私達(自己称)」(baga:)とが異なる(しかもさまざまなレベルで)方言が多い
- ① 「彼等は…するけど私達は…しよう。」(敵味方に分かれる場合など)
- ② 新しいお嫁さんに「ここが私達の畑(お墓)だよ」と教える。他人に言う時と比較。
 (来間) du:ta: paka (pari). baNta: paka (pari)
 自分達の 墓 畑 私達の (まだ家族と認められていない感じ)
- ③ 孫に「お家に行こう」。友達に「家にいらっしやい」。「うち」にどう言うか。
 бага: ge: hara. baNca ge: hara.
 家 に行こう(孫に言う) うち に行こう(他人に言う)
- ④ 他村に嫁ぐ娘に「私達の(村)の風習はこうだけど、あちらは…」

- (5) 3人称の再起代名詞的なものの存在を単数複数形(**na:ra, natta:**)ともに確かめる。(1・2人称にも同じ形があるのか、違う形を使うのかも確かめる。)

単・複を確かめるのには、個人使用の物と家族使用の物(家は普通複数)を考える。

「黙って持っていっちゃった」と思い違いする。「Aさんは自分のを持って行ったんだよ。」

(与那国) uja sa: munu.

それは 彼自身の物 (彼が自分の物を持っていった)

借りた鍋 nabi を持っていった人がある。勝手に持っていったかと思って、

A: kari Ga mutti hjuN. B: je: ure: sji: munu

彼 が 持って行った えー あれは 彼ら自身(彼のうち)のもの

- (6) 文体的に異なる形—例えば2人称の敬語形—があるときは序にそれに伴う「はい」に当たる返事の形も採っておくと便利

(沖縄語辞典) ?jaa, naa, ?uNzu 他

返事(はい)の例(辺土名) u:, o:, i:, 3種類がある。

- (7) 指示詞

単数 kuri (uri) kari 人を指せるかどうか

複数 kuQta: (uQta:) kaQta:

場所 kuma (uma) kama ① こっちへお出で。②一寸そこまで。

- (8) 副詞的代名詞(こう、そう、ああ)

指示詞と必ずしも並行的でない。

aNzji, kaNzji, (×kuNzji, ×uNzji)

そう こう

3. 名詞(固有名詞) 補助詞

基礎語彙表を使って調べる。勿論、動詞などと同時に調査してもいいが、調査を単純化するために、何十個くらいは知っていた方が便利である。基礎語彙表になくても次のような語彙は心がけておく。

十二支 :年齢が正確にわかるという利点もある。(お年寄りには数え年の場合もある)

数え方 (一つ、二つ…一人、二人…一束、一回…)

次の音の対応語: ワ行音(井草、亥、苧、襟など)、

エ段の音を含む語 イ段の音を含む語

語頭のハ行音対応語～カ行音対応語

ガ行音対応語

ラ行音(特に音節リ)

- (1) 助詞「は」相当の語が接する時、名詞の語末音節は形を変えることが多い。それを先ず調べる。そのためには例文の作り易さから人名を用いるといい。その場合、嘗ては(昭和10年位まで)、戸籍名の他に方言名を持つのが常だったから、それを採取しながら

「誰々はいる」「誰々はいない」のようにすると楽しい。人名は最終音節に限られているかもしれないが、全体の見当がつくから、その後で名詞の語末音節(含む成節的子音)全部を調べる。これにより、逆に名詞の語末音が判明することもある。

(平良西仲)

長母音 V:→+ ja sjinsji:先生→sjinsji: ja

短母音 a→a: pana花→pana:, u→o: fumo,雲→fumo:, i→ja: ami,雨→amja:

子音 m→mma, num蚤→numma, n→nna, in犬→inna, v→vva, pav蛇→pavva

子音 Z(2重母音の後部要素として記されることが多い)

Z→zza, maZ米→mazza, piZ針→pizza, tuZ鳥→tuzza

長子音 m:→mma, m:芋→mma(:)

短母音 I -bl + -za kabI紙→kabIza -gl + -za mugI麦→mugIza

-kl + -za kakI垣→kakIza kl + -sa iskakI石垣→iskakIza

-sl→ssa junusI人名→junussa- tsI→-ttsa matsI人名→mattsa

-zl→-ttsa tuzI妻→tuttsa

- (2) 「これは…だ」という時も同様なことがある方言もある。

(黒島)ure: nu: ja. (これは何か)に対する返事

sabaN nawaja:. kiN na waja:. sa: jawaja:. pe: jawaja:. ki: jawaja.

茶碗だ 着物だ 茶だ 緋だ 木だ

hata waja:. para waja:. usje waja:. izo waja:.

肩(hata)だ 針(parI)だ 牛(usji)だ 魚(izu)だ

- (3) 「へ」相当の語が接する時も同様なことが起こる方言もある。

(黒島) hama-ha, iso-ho, hanu piso ho, usje he, iN ha

あそこへ 磯へ あの人(pisu)へ, 牛(usji)へ, 犬(iN)へ

- (4) 「が」相当の語の接し方も注意する。多くの方言で、物と人で異なる。代名詞を含め留意しておく。

(沖縄語辞典) wa: ga, ari ga, siNsii ga, tui nu, tiida nu,

私が 彼が 先生が 鳥が 太陽が

- (5) 琉球の諸方言には「…だ」に相当するコプラがある。(2)であげたのがその一例だから、名詞と一緒に採集してもいい。動詞のように語形変化をするから注意。また、「ある」と同じ語がその役を担う方言もある。言い切る時は普通現れない方言もある。

(言語学大辞典他)

首里	今帰仁	平良	石垣	与那国	名瀬
jaN	eN~jar-	jaI	jaN	aN	zja~?a-

4. 動詞

常時必要な予備知識

- ①日本語動詞の5段・上下1段活用。「する」「来る」「ある」「いる」など変格活用動詞。
- ②日本語5段活用動詞終止形末尾母音の直前の子音(または母音)

③先に調べた代名詞の知識（行為者が誰かにより動詞形が異なる）

注意事項

- ① 語形変化を調べながらテンス・アスペクト・ムード等にも気を配る。各分野集中というのいいが、それでは話者も楽しくない。ある程度は総合的にやって、見当がついてから各分野を集中的にしたほうが調査者も話者も慣れる。
- ② 本土方言の形と **1対1** に対応するとは限らない。重要動詞(含変格活用動詞)は特に注意。勿論文法的範疇も **1対1** に対応するとは限らない。対応しないと始めて始めた方が安全である。
- ③ 本土 **5** 段活用対応動詞、上下 **1** 段活用対応動詞、「する」「来る」「ある」「いる」など変格活用動詞は、常時注意している。**5** 段動詞は、語幹末子音が軟口蓋音である方が区別(口蓋化・非口蓋化)を持っている可能性が高い。
- ④ 「書く・書かない・書きたい・書く時・書けば・書け・書いた・書いて」などから始めても場合によってはいいが、それでは話者が楽しくない。調査者も共時的に大切な形を取りこぼす。なるべく臨場感があるような場面を設定した方がいい。既述したように、話者の内省は大切にすることが、抽象化を話者に求めてはならない。
- ⑤ 琉球諸方言では、多くの場合、話し手が重要である。話し手の **modus** 的な面(認識、判断のあり方)を常に注意する。自分(**1** 人称)の行為か、相手(**2** 人称)の行為か、話し合っている二人に無関係な他者(**3** 人称)の行為か常に確かめる。質問文の時に明瞭になることが多い。
- ⑥ 話し手が、その行為を見て(経験して)いるかどうかということは常に重要である。更に話し手が確認したかどうかも重要である。

項目

(1) **3** 人(以上)を設定する。その行為と話し手は、どういう関係であるかをはっきりさせておく。①話し手の行為か、②話し手とそれに属する人の行為か、③話し相手の行為か、④第3者の行為か。⑤物(現象)の行為—「咲く」「降る」「(風が)吹く」「枯れる」—か、など。

① ba: kakuN./? ③ wa: kakuN? × wa: kakuN. ④ atsuko kakuN./?
私 書く。/? あんた書く? あんた書く。 敦子 書く。/?

② baNda: kakuN. baga: kakuN? × baga: kakuN. cf. baga: kaka. ba: kaka.
私達 書く 私達 書く? 私達 書こう 私 書こう

③ wa: kakuN? 答えて① ba: kakanu. × ba: kakanu do:.
あんた書く? 私 書かない。

② baga: kakuN? 答えて baga: kakanu do:. × baga: kakanu.
私達 書く? 私達 書かない。

⑤ hana sakuN./? 答えて sakuN.
花 咲く。/? 咲く

①話し手とそれ以外では異なることが多い。

(平良西仲)肯定と否定

(a) ta: ga kakadi? 誰が書くのという質問に答えて

baga kakadi. atsuko ga du kakI (gamata). ×atsuko ga kakadi

私が 書く 敦子が 書く

(b) kaki 返事して kakamba. / kakadjan. (話し手本人)

書け 書かない 書かない

しかし karja: kakan ×kakadjan

彼は 書かない

(2) 質問がどんな風にできるか。2 人称主体では、質問だけが可ということもある。①質問にならない形もある。②話し相手の行為と 3 人称の行為、③行為の確認、見ながらか、見えていないか④ 3 人称の行為を見ながら確認質問ができるかどうか。内省の参考例も付した。

① ba: atugani kakjaN. ×wa: atugani kakjaN./? ×atsuko: atugani kakjaN?

私は 後で 書く

② (久場)

(a) ?ja: kacumi? しかし (×)(?) atsuko kacumi?

あんた書く 敦子 書く この時は以下の方が好ましい

atsuko ja kacuga ja: 答えて kacu isani

敦子 は 書くかな 書くんじゃない

(b) 敦子と一緒に隣室で手紙を書いているが、途中で出て来た人に

?ja: tigami kaco:mi? (動作見えない)

あんた手紙 書いている

atsuko kaco:ti:?

×atsuko kaco:mi?

敦子 書いていた

敦子 書いてる

(c) ?ja: tigami kaci:?

× atsuko kaci:?

あんた手紙書いた(書き終わったと思っている)

atsuko kacuti: ?

敦子 書いてた (敦子が見ているのを見たか)

③ (a) taraNdaru muno: wa: kakiN? kakiN.

頼んだ 物は あんた書いてる? 書いてる (動作は見えない)

(b) wa: kakiN? (動作は見えない) ×wa: kakiN? (動作が見えている時)

あんた書いてる?(戸に遮られて見えない) 書いているのを見ながらでは不可。

(c) wa: tigami du kakiru? wa: tigami kaki duru? (共に動作が見えている)

あんた手紙を書いているの?あんた手紙書いているの(書かなくてもいいのに)

④ (a) A: atsuko: nakiN? B: nakiN.

敦子 泣いてる? 泣いてる。(泣いているらしい後姿を見ながら)

そこで、敦子の所に行って ×atsuko: wa: nakiN? (動作は見えている)
敦子 あんた泣いてる

内省「wa: nakiN? というと泣くことを楽しんでいるような気がする。」

(b) (久場)泣いている人のところに行って 見ながら確認の質問はできない。

nu:ga naco:ru × ?ja: naco:mi ?

どうして泣いてるの あんた泣いてるの?

内省「泣くことを要求しているような気がする。泣くべきなのに泣いていないのか」

(c) (久場)第3者どうしても、動作を見ながらでは(b)同様 × atsuko naco:mi ?

A: are: naciru uNna: B: naco:Ndo:

彼は 泣いているのね 泣いているよ(理由が良くわかっている)

- (3) 疑問詞のある質問文。いわゆる係り結びの形だが、注意して調べる。行為が具体的に決まっているかにどうかにより、異なることがある。係りを必ずしも必要としない。既に決定していても話し手が知らない場合に注意。質問文の動詞形と答えの動詞形にも注意する。

① ta: du kaku? atsuko Ndu kaku. no:du kaku? ba: unu zI: du kaku.
誰が 書くの 敦子が 書く。 何を 書く 私 この 字を 書く。

② ta: du kakja? atsuko Ndu kakjaN.
誰が 書くの。 敦子 が 書くの。(敦子が書くことが既に決まっている)

① zI: ja no: sa:ri (du) kaku? hudi sa:ri (du) kaku.
字は 何 で 書くの。 筆 で 書く。

② kunu zI: ja no:sa:ri (du) kakja? hudi sa:ri (du) kaku. × kakja
この 字 は 何 で 書くの 筆 で 書く

②(平良西仲) ta: ga kakja:? 答えて kai / бага du kakI (ga mata). × kakadi
誰 が 書くの (書く人が決まっている) 彼 / 私 が 書く

③ (平良西仲) no:ju ga kakacca. 答えて tigami ju. (du kakI)
何を 書くの 手紙 を × kakadi × kakacca

- (4) 話し手がその行為(行動)を「見て(直接経験)」いるかどうかは重要である。基本的に見ていないというのは無いという方言が多い。多くの琉球方言では、現在時制とは話し手の認識の上にあるのだが、過去というのも無限ではない。過去とは、話し手の経験中の過去であって、それ以外は伝聞にしなければならないという方言も多い。

① ami nu huiriki mukaina: kuN_co:

雨 が 降ってるから 迎えに 来るってよ (電話で言付けがあった)

② ba: maridakeNja kazji Ndu hukida co:. Cf. kIno: kazji Ndu hukida.

私の生まれた時は風が吹いていたんだと 昨日は 風 が 吹いた

- (5) 相手を見ながら確かめる場合は、いわゆる係り結びがあるから、構文的に注意が必要である。他動詞と自動詞を意識的に調べる。

wa: tigami du kakiru? wa: du tigami kakiru? wa: tigami kaki duru?

あんた手紙を書いているの あんたが 手紙書いているの あんた手紙書いてなんかいる

× wa: du nakiru? ? wa: naki duru?
 あんたが泣いてるの あんた泣いてなんかいるの(泣くこと無いのに)

- (6) 「死ぬ」も必要だが「縁起が悪い」からなるべく鼠やゴキブリに例をとる。無意思動詞として「咲く」「降る」などとの共通性があることもある。

ba: tigami kakiruNkeN wa: ikite ku:. ba ikite kuNkeN wa: tigami kakiruN?
 私 手紙 書いている間 あんた 行って来い 私 行って来る間 あんた手紙書いている
 ×ba: sjiniruN. ×ujaNco: siniruN. ×ami huiruN. ×hana sakiruN.
 私 死んでいる 鼠は 死んでいる 雨 降っている 花 咲いている

- (7) 動作を見ているか、見ていないか。また、相手から自分の行動が見えているかどうかが必要な条件であることは多い。「電話で話す(見えない)」というのも使い甲斐がある。確認しながら話すことになる。

①A: taraNdaru muno: kakiN? B: kakiN. (道端、戸を隔てて等の会話)
 頼んだ 物は 書いている 書いている

A(電話で): no: du hi: uru. (hi:ru 可) cf. 対面では普通 no: du hi:ru.
 何を している 何を している

taraNdaru muno: kakiN? B: kaki uruN. (kakiN 可、対面では kikiN)
 頼んだ もの 書いている 書いている

A: atsuko: kakiN? (Aからは見えない) B(見て): kaki duru. (kakiN 可)
 敦子は 書いている 書いている

- ②見ながらの叙述(質問文になるかどうかとも確かめる)

wa: kakiso:. ba: kakaNtiN misjaN.
 あんたが書いている 私は 書かなくて いい (相手が書いているのを見ながら)
 ba: kakiso:. wa: kakana:rja. (自分が書きながら)
 私 書いているの あんた 書かないで

- (8) その行為が話し手にとって、望ましいか望ましくないか。意に反するか。同じ動作でも、異なることがある。

- ①(辺土名)

(a) 敦子のお母さんが亡くなったので、友人がその親類の人に尋ねる。

友人: atsuko maco:ti: na. ×nakiti:na 親類: naco:taN.
 敦子 泣いてたか 泣いてた

(b) 敦子が非行少女で親に反抗して家出していた。ところが、親が亡くなったので帰ってきた。そこで同居の親類の人に尋ねる。

A: atsuko nakiti:na ×naco:ti:na 親類: nakitaN
 敦子 泣いてたか 泣いてた

A: arigaN nakite:ssa ja: ×nace:ssa ja:
 あれまでも 泣いたんだね 泣いたんだね

(b)は泣く行為が望ましい(ちゃんと泣いた)。

- ② × wa: hwa: ja nakiN? (体が弱くて泣く力もない子が泣いてるかという時は可)
 あんたの子は泣いてる (ちゃんと泣いてるか)
- ③ unu bi:ca: mata ki:CaN. Cf. atsuko ki:Ta.
 この酔っ払いまた来ちゃった 敦子 来た (敦子を待っていた)
- ④. **kakaba mucu harja.** × **sInaba** (代わりに sInuKa:)
 書いたら持って行け 死んだら(死にたがっているよう)
- (9) 話し手の判断と叙述。及びその質問のあり方。
- ① jagati ami hwo:N./? しかし × ami hwo:N?
 間もなく雨 降る(黒雲を見ながら) 雨 降る
- ② atsuko kakIso:. wa: higu kakja. × atsuko kakIso:?
 敦子 書くよ あんた早く書け
- ③ (平良西仲) kai ga kakIm do:. Cf. kai ga du kakI (ga mata). (彼が書く)
 彼が 書くよ (ほら今書こうとしてるよ。あんた早く行って書け)
- (10) 初めての判断であるか(発見)、期待していたことであるか。思いがけないことか。
 遠くから来る人を見て、それが敦子だとわかった時、
 atsuko juN. atsuko jaruN. atsuko jarjaN. atsuko jare:rjaN.
 敦子 だ 敦子なんだ 敦子なんだった 敦子 なんだったんだ
- (11) 日常的な、習慣的なことかどうか。
- ① ba: mainitsI sjiNbuN jumuN.
 私 毎日 新聞 読む
- ② ba: gaQko: ge: haru.
 私 学校 へ 行く(今学校へ行く子供が母に言う)
- ③ (平良西仲) ba: ja mainitsI tigami ju kakI. cf. бага kakadi. kari ga du kakI.
 私は毎日 手紙 を 書く 私 書く 彼が 書く
- (12) 過去の時制では、先ず過去の語(昔、昨日、去年、…の時)との共存を見る。
 mukasa: ju: tigami kakIda. kInu du kakIda.
 昔は よく 手紙 書いた 昨日 書いた
 (上記は 1・3 人称ともに可、しかし書いたのを見知っていなければならない。同様な時は、見知っていない場合についても調べる。)
- (13) 順番にする行動。(もう書いたか、まだか)
 全員が順番に黒板に出て書くことになっている。先生が生徒に確かめて、
 先生: wa: kakiTa? 生徒: me:da kakanu.
 あんた書いた(書き終わったか) まだ 書かない(てない)(生徒は書きに出る)
 Cf. 隣室で書いている人々のうち一人が途中で出て来た。もう済んだのかと思い、
 A: wa: kakiTa? B: me:da kakanu.
 あんた書いた まだ 書かない(てない)(書いている途中)
- (14) 瞬間的な認識。赤ちゃんが縁側から「落ちる」「落ちた」などが便利。瞬間動詞でも、その落ちた(上から離れる時)／起きた(目を開けた時)を確かめることも心がける

(g) 忘れていた場所に来て思い出し、 ba: manta Nga ke:N.
私 前 に 来た(ことがある)

(h) 犬の足跡があつて床が汚れている。 iN nuNdu arage:ru.
犬 が 歩いたんだ

(17) 使役には、直接の使役と、人に言ってやらせる間接の使役の接辞がある。一段対応動詞に注意

- ① kak-u- 書く kaka-hu- 書かせる kaka-sjimiru- 人に言って書かせる
② uk-iru- 起きる uka-hu- 起こす uka-sjimiru- 人に言って起こす
③ ak-iru- 開ける × aki-sjimiru- 人に言って開けさせる

書く(実例は石垣宮良方言)

例文は、話者との兼ね合いで場面を設定する。ある程度すると話者の方も面白がり、「こんな人もいるから」と条件をつけたり、後回しにしたり、遠慮したりといろいろな形、表現が出てくる。それらを整理して、次は形の規則性の方から確認していく。参考を記す。

●何か書くことになった。(学校・会合・黒板に、書類を、記録等々わいわいがやがや)

①「誰が書く?」「私が書く。」「私も書く。」「あんた書きなさい。」「何を書くの?」
“ta: du kaku?” “ba: du kaku.” “banuN kakuN.” “wa: kakja.” “no: du kaku.”

②「あんたも書く?」「私は書かない。」「書けばいいのに。」「じゃ、書こう。」「
“wanuN kakuN?” “ba: kakanu.” “kakja: misja:ru munu.” “anžuKa: kakuN.”

③「あんた書きたい?」「書きたくない。」「書く人がいないなら、私が書くよ」
“wa: kakIpusuN?” “kakIpusanu.” “kaku pItu urana:Ka: ba: kakuN.”

●「敦子が書くよ」「敦子が書く?」「敦子は書かないよ」「敦子は書くだろう」
“atsuko: kakuN.” “atsuko: kakuN?” “atsuko: kakanu.” “atsuko: kaku hazI.”

●書く人を敦子に決めたところで、光子が入ってきて問う。

「誰が書くの?」「敦子が書くんだよ」
“ta: du kakja?” “atsuko Ndu kakjaN.”

●希望者が多い。「みんなで書こう」
“(baga:) ma:zoN kaka”

●グループ対抗「あの人達は早く書くけど、私達はゆっくり書こう」
“uQta: hajamari kakabaN baga: jurQtu kaka na:.”

●順番に書くことになった。
「あんたもう書いた?」「まだ書いてない」「あんたは?」「書いた」
“wa: kakiTa?” “me:da kakanu.” “wa: kakiTa?” “kakiTa.”

「敦子は書いた?」「書いたよ。」
“atsuko: kakiTa?” “kakiTa.”

●「敦子は書いた?」「今書いてるよ。」「陽子は書いてた?」「書いてる(のを見た)。」
“atsuko: kakiTa?” “nama du kakiru.” “jo:ko: kakida?” “kakida.”

●書いたものを見ながら

「これは誰が書いたの」「敦子が書いたの(敦子が書くのを見た)」

“kure: ta: du kake:ru?” “atsuko Ndu kakIda.”

「これは誰が書いたの」「名前があるから、敦子が書いたんだ(書くのは見ていない)」

“kure: ta: du kake:ru?” “na: nu ariki, atsukoN du kake:ru na:?”

●道端で出会って、「頼んだもの書いてる?」「書いてる」

“taraNdaru muno: kakiN?” “kakiN”

その書類を取りに行く。「頼んだの書いた?」「書いてある。」

“taraNdaru muno: kake:N?” “kake:N.”

取りに来た時まだ書いている最中

戸を隔てて見えないとき “nama kakiN.” 見えるとき “nama du kakiru”

●「頼んだもの書かなくてよくなった。書いちゃった?」「あら。書いちゃった。」

“taraNdaru muno: kakaNtiN misjaN. wa: kakiCaN?” “agajo: kakiCaN.”

●「何処で書く?」、「何で書く?」、「どう書く?」

“zImaNga du kaku?” “no: sa:ri du kaku” “no:ba hi du kaku/kakja:?”

このくらいでひとまず整理して足りない形を調べる。

例えば 書く **kakiN** : **kakuN**,

: : **(kakiruN)**

起きる **ukiN** : **ukiruN**,

(× ukuN)

4 形の上表のように見れば、**kakiruN**, **ukuN**, があるかどうか知りたくなる。すると、**kakiruN** は限られた用法でも実在するが、**ukuN** は無いということがわかる。勿論状況に応じて他の動詞を用いることも心がける。

5 . 形容詞

注意事項

- ①語幹と語尾に注目する。
- ②語尾の形に注意する。方言により異なる。

項目

(1) 語尾が動詞と同様か異なるか。違った語尾があるか。どのような違いか。

- | | | | |
|------------------------|-----------|---------------------|-------------|
| ① sane- <u>he-N</u> | 嬉しい(と感ずる) | kake:- <u>N</u> | 書いてある(と認める) |
| sane-he:- <u>da-ru</u> | 嬉しい | kake:- <u>da-ru</u> | 書いてある |
| sane-he:- <u>da</u> | 嬉しかった | kake:- <u>da</u> | 書いてあった |

②2種の語尾(佐和田)

- | | | | |
|----------------------------|-----|----------------------------------|----------|
| (a) pukaras <u>Imunu</u> : | 嬉しい | pukaras <u>Imunu</u> <u>atam</u> | 今日は嬉しかった |
| (b) pukaras <u>Ikam</u> | 嬉しい | pukaras <u>Ikam</u> | 嬉しかった |

③(伊良部)

Nmaham 美味しい(食べてから言う) Nmamunu
 fufumunu 黒い × fufuham

④(黒島) haijaN 美しい sanijaN うれしい
 akahaN 赤い ma:haN うまい

⑤形容詞語尾の母音が、語幹末音と呼応することがある。

語幹	a	u/o	i/e	I	i:
語尾	-haN	-hoN	-heN	-saN	-sjaN

takahaN(広い), pisohoN(広い), kaiheN(美しい), sI:saN(すっぱい), p:sjaN(寒い)

(2) 主観的形容詞(大体シク活用に対応)と客観的形容(大体ク活用に対応)が形として異なる(首里、黒島)場合もあるが、接辞で異なる時もある。

① ba: saneheN. atsuko: sanehe huN. × atsuko saneheN.

私 嬉しい 敦子は 嬉しくする(喜ぶ)

② ba: sanehe: du aQta. atsuko: sanehe: du sIta.

私 嬉しかった 敦子は 嬉しくした(喜んだ)

×ba: sanehe: du sIta. ×atsuko: sanehe: du aQta.

(3) この「する」を意味する動詞との結合は琉球方言に広くあるので注意する。

(4) 動詞と同様な語尾を持つ場合は動詞との整合性に注意する。

kju: ja pi:sjadaru. 外に出て冷たい風にあたって pi:sjaN.
 今日 寒い 寒い

以上